

2020年漁期のイサザ資源の現況把握調査結果

大前信輔・太田滋規・田中秀具・久米弘人・松田直往

1. 目的

イサザは、琵琶湖漁業の重要な漁獲対象魚種であると同時に、資源量が大きく増減することが知られている。このため各生活史段階において、資源状態を評価しておくことは資源状態が変動した時に、その原因を検討し、対策を考える上で非常に有益である。そこで産卵、仔魚、稚魚にいたる各段階において目視または採捕調査を行った。

2. 方法

3月上旬から8月上旬にかけてイサザの生活史段階ごとに調査を行った。すなわち、水産試験場船溜まりでの籠網による親魚調査、海津大崎での潜水目視による産卵床調査、海津大崎地先での多層曳網の10分間曳網による浮遊仔魚調査、および彦根・長浜地先での小型沖曳網による稚魚調査を実施し、各段階での資源状況を評価した。

3. 結果

親魚調査

籠網を4個設置し、3月2日から5月27日にかけて約1週間ごとに実施した。4月9日にピーク(84.3尾/籠/日)を示し、その後減少し、5月27日には0尾/籠/日となった。4月平均値は35.7尾/籠/日であり、過去4月平均値(2013~2019年)の63.8尾/籠/日を下回った。

産卵調査

岸から沖合方向へ30mの観測線2本を設定し、4月10日と4月28日に実施した。生産卵床数は4月10日が122床、28日が90床であり、平均は106.0床/日であった。過去平均値(2013~2019年)が113.5床/日であり、わずかに下回った。4月10日の死産

卵床率は16%であり、前年同時期の2019年4月12日の2%より大幅に増加した。2020年の産卵場では糸状藻類が一面に大繁茂し、産卵床の通水性が低下したことから死産卵床率が増加したと考えられた。

浮遊仔魚調査

海津大崎地先の沿岸から0.2kmと2km離れた地点で5月8日、6月2日および7月2日に実施した。多層曳網の曳網速度は約1.5ノット、曳網時間は10分とした。7月2日にはイサザ仔魚は採取されなかった。6月2日の深度11~18mでは9尾/網/hr採捕され、6月上旬の過去平均値(2015年除く2013~2019年)の28.9尾/網/hrを下回った。

稚魚調査

水深20m地点で7月9日と8月11日に実施した。9.3尾/曳網採捕された。過去平均値(2013~2019年)は141.9尾/曳網であり、2020年は大幅に減少した(図1)。

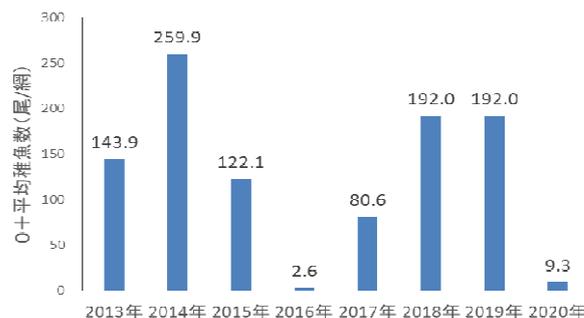


図1 小型沖曳網による稚魚採捕数の経年変化

2020年漁期(2020年秋~2021年春)のイサザ漁は不漁と言われており、上記の結果から、仔魚期に減耗して2020年加入資源が少なかった事が原因と考えられた。